
販売員ではありません。

悠梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

販売員ではありません。

【Zコード】

Z7331

【作者名】

悠梨

【あらすじ】

両親不在でタイクツしていた少年、ルディアス・マクガルディ。つい飼い猫とうとうとしているところ……。
一方、新米の魔王ケイオスは、今日も部下のフライスに叱られていた。

その日も、ルディアス・マクガルデは タイクツしていたのだった。父は例によつて騎士団長に助力を請われて出かけていたし、母は……今はどこにいるのかすら分からぬし、そう滅多には帰つてこない（その代わり、帰つてくれたらいつも珍しいお土産を（物も話も）たくさん持ち帰つてくれるし、しばらくは嫌といつほど遊んでくれる）。

お手伝いのクリスおばさんは、いつものように家事の出来ない両親に代わつて洗濯や掃除・夕食の調理などにんてこまいだし、書庫にあつた子供向けの本はほとんど読破してしまつてい、目新しいものは何も無かつた。

いつもなら相手にしてくれる家庭教師のケッヘルさんは、今日に限つて仕事が終わるや否や、そそくさと帰つてしまつた。彼女とデータらしい。これだから大人つてやつは。

仕方なく庭に置いてある籠で、手足を畳んで箱型になつて口向ぼつこしていた猫のチビ（今でこそデカイが、拾つた当初は手のひらサイズだつたらしい）を撫で回していたら、ウザそうに顔をしかめられた。尻尾が不機嫌そうにバサバサと振られている。

猫という生き物は、そこにいるだけで眠氣を振り撒いている……とは父親の弁。

確かにそうかも知れない。チビの真つ白で柔らかい毛並みを行きつ戾りつ、もふもふと堪能していると欠伸が漏れてしまった。

当のチビは表情こそウザそうだが、今はもう尻尾も振つていない。多分撫でられているうちに、自分も眠くなってきたのだろう。ゴロンと身体を横たえると、目を閉じてしまった。

「坊ちゃん、おやつの時間ですよー」

いつの間にやらウトウトしてしまっていたらしい。クリスおばさんの声に目を開くと、チビは彼の腕を枕にしてスヤスヤと寝息を立てていた。

何だろ？、何かひどく楽しい夢を見ていた気がするのだが、思い出せない。

「また、会えるかな？」

無意識に咳いて寝ぼけた眼をこすりこすり、猫を起こさないようにそおつと腕を引き抜いて彼は立ち上がった。ブーツとパンツにたくさんついた草と猫毛を払い落としつつ、元気な返事をおばさんに返す。

おばさんの作ってくれるお菓子は絶品なのだ。今日は多分、ミルクをたっぷり入れた紅茶と採れ立てリンゴで作ってくれたアップルパイだろ？。生クリームがたっぷり添えてあれば嬉しい

「……で、まんまと返してしまったわけですか

頭痛をこらえるかのように片手を「メカニ」にやりながら、彼が言う……そらまた始まつた、お説教だ。そう思いつつ、ケイオスはさつさと両手で自分の耳をふさいだ。いつものことなので、この次に何が来るのかも分かる。

「アンタ一体何考えてるんですか？！――こんなチャンスを無駄にするなんて！――」

あたり一体がその怒声にビリビリと震えた。古ぼけた根城の壁も天井も相当脆くなっているので、いつ崩壊してもおかしくはないはずだったが、そこはそれ、自分が結界を張つて防いでいるので大丈夫だろ？。

「怒鳴らないでよ、フライス。ボクだって、これでも頑張ったんだよ？」

でもあまりにもあの子、ルディって言つたつけ？ 純粋無垢でね？。

ついついほだされちゃつた。てへへ。

頭を搔きながら言つてみると、フライスが床に手をついている。ぶつぶつと唱えているのは、多分呪文。

どこか他人事のような気持ちで思う。あ、こりやヤバイわ。ふと、フライスが顔を上げた。床にはボンヤリと魔方陣が光る。彼が息を吸う。予想通り怒声が放たれる。

「アンタってヒトは／＼／＼／＼／＼！」

閃光が瞬いて爆音が

……しなかつた。

フライスの描いた魔法陣に重なるようにして、もう一つの魔法陣が光っていた。自分が彼の魔法をキヤンセルするために、瞬時に描いたものだ。この程度の魔法なら、呪文の詠唱すら必要は無い。しかしそのくらいのことはフライスも予想していたのだろう。怒りの表情はそのままに、まくしたててくる。

「バカ、ホントに大バカ！　お父上の　先代魔王サマの、憎き仇の息子ですよ！？　なんで捕られて殺さないんですか？」

「ん～そんなこと言われてもなあ。ボク、父上の666番目の子供だよ？　ほとんど父に会ったことも無いしなあ」

ていうかさ、何でボクが次の魔王継がなきやいけないの？

何度もかの同じ問いを口にすると、フライスが奇声を発しながら髪をかきむしっている。

いつもそんなにカリカリして、カルシウムが足りてないんじゃないのかと思つ。

「あーーーーもうホントやつてらんねえ————なんでこんなバカ息子が一番魔力持つてんだよ————なんでオレこんなバカ息子の教育係しなきやなんねーんだよ————」

……そんなこといわれても。

だがつまるところ、この魔力さえ無ければ自分は「魔王」なんて面

倒な立場にいなくて済むのだが。

「大体さあフライス、冷静に考えてごらんよ。明らかに父上の方が悪いじゃん。破っちゃならない「均衡」と「法則」を犯したのは、父上でしょ？　ぶっちゃけ消し炭にされても自業自得じゃん」「

その2

とりあえず人間の書物に書かれている魔物像を演じてみようと思つた。

ぶつちやけていえば、それは退屈しおぎだつた。

フライスの目を盗んで、こつそりと根城を抜け出した。ヤツときたら、口を開けばやれ「父上の遺志を継げ」だの「魔族勢力の再興を！」だの「魔王としての自覚を持て」だと、口やかましいたらありやしない。

大体「魔王としての自覚」って何なのだらう。自分はきちんと「三者により定められた法則」に則り、「結界と世界樹の監視と管理」をして「均衡の維持」に努めている。それ以上、何をしろといふのだろう？

一度考え出すと、妙にそのことが気になつた。

お気に入りの世界樹の幹によりかかつて、悶々と考えているが答えは出ない。

そもそも自分と同じように怠惰な性格だった父が、なんで人間なんぞに戦争を吹つかけたのかも分からぬし、魔族という存在が人間にどう思われているのかといふことも分からぬ。

魔族と人間、異種族間にあるものは　?

外の世界に興味を持つたのは、それが初めてのことだつた。とりあえず一旦居城に帰つたケイオスは、父親が遺した書籍を漁つてみることにした。

書斎の扉は重く錆びついて、室内のカビ臭さが何故か心地よい。蔵書は思ったより多くて、沢山の本棚に分厚い書籍がぎっしりと詰まっている。何でも、父がここを根城に定める前に住んでいた人間が置いていったものだという。

その中の一冊を何となく手にとつて開いて

「で、やうこうカツコウで僕のところに来たの？」

「うん。ついでに言えば、これからキミを連れ去るうと思つてます」正直なところ、少し凹んでいた。田の前の少年のリアクションは自分の期待とは全く異なっていたので。

何となく一番近くの街にやつてきたケイオスは、これまた何となく街の入り口から近いところにある屋敷にコッソリと忍び込んだのだった。

先ほど読んだ書籍で予習はバツチリである。あの本によれば、人間の想像している「魔王」とは長い白髪の老人で、小さな子供をさらつてゆくのだという。

とりあえずそれをすれば、フライスにも「魔王としての自覚がある」と認めてもらえるのだろう。そう思った彼は、自身の姿を白髪の老人に変え、屋敷の庭で猫と一緒にウトウトしてくる子供をさらつて帰ろうとして近づいた。

子供はすやすやと気持ち良さそうな寝息を立てていたが、自分が近づいたのを気配で察したのだろう。

ゆっくりと猫の毛に埋めていた頭を上げて、少年は焦点の合わない目で自分を眺め、そしてひとこと。

「……『子供用の教材なら間に合つてます』ってお父さんが」

「……」

何と返したら良いものか。ケイオスは迷った。が、とりあえず。

「お母さんじやなくて、お父さんがそう言つたの？」

「突つ込むとこ、そこー!？」

ガバッと顔を上げて即座に突つ込みを入れると、子供は何がおかしいのか大爆笑している。

そういうえば、こんなに笑っているヒトを見るのは生まれて初めてだ。

1、2回しか会つたことは無いが、記憶に残っている父親は常に不敵で悪い感じの笑顔しか見せなかつたし、木靈である母はそもそも姿を見ること自体稀だつた。

……それにしても、何でこんなに笑つてるのかも分からぬいが、見てて悪い気はしないのが不思議だ。

ケラケラと可愛らしい高い声を上げてひとしきり笑うと、子供は目の端に浮かんだ涙を拭つて言つてくる。

「おじいちゃん、教材の販売員じゃないの?」

「よく分からんが、違う」

「じゃ、誰?」

ふふふ、このときを待つていたのだ。ケイオスは内心ほくそ笑むと、

「坊や、我と共に来るが良い。我が名は『魔王』。そなたは選ばれたのだ、素晴らしい場所へと招待しようぞ!」

ばかり。被つていたフードのついた外套を払い、高らかと言い放つた。

ひゅるり。庭に冷たい風が吹き抜けた　よつな、気がする。

なぜだかケイオスは、そこらに「六」があつたら入りたいような気分に見舞われた。

「　の『魔王』の一節だね、それ」

冷たい空気を払拭するかのように、子供が苦笑いで言つ。

「おじいちゃん、本当のところは何しに来たの？」

「……いや、だからそなたを選ばれた場所へ」

「それもう聴いた。で？」

「えーと……」

「……？」

「……」

無いのなら　掘つてしまおう　墓の穴（五・七・五）。
生憎、スコップは持ち合わせていないが。

「で、そういうカツコウで僕のところに来たの？」

「うん。ついでに言えば、これからキミを連れ去りうと思つてます
事情を話せば、子供はひとまず納得したようだつた。ふうん、と他
人事のように相槌を打ちつつ、「でもさ」と言葉を継いだ。
「僕をどこに連れ去るつもり？」

「僕の住んでる城へ」

「連れ去つて、どうするの？」

「それは……えーと」

そういうえば、そこまで考えていなかつた。むむむ、と頭を抱えながら

ら考え込んでしまつ。

その様子を少し冷めた目で見ていた子供 ルディアスとかいつたか が、猫の背を撫でながら言ひ。

「おじいさんや、『魔王』って言ひたよね？」

「うん。あ、でも僕まだ『おじいさん』って言われるほどどの歳じゃないんだけど。この姿も、本当の姿じゃないし」

「いくつ？」

「忘れた。でも魔族的にはまだ『おじいさん』じゃないんだよ」というかさ、本当の姿に戻つてもいい？

いつもと違う姿で長いことこのので、何となく居心地が悪くともやもやしてしまつ。

「だめ。『魔王』ってことは、人間じゃないんでしょう？ ここでは元の姿に戻つたら、人間に殺されちゃうよ！」

それもそうである。この子供、実年齢以上に聰明だ。

「おじいさんじゃなら、何て呼んだらいいの？ 『魔王』さん？」

「一応僕、ケイオスっていう名前があるんだ。そっちで呼んでよ」

「分かつた。じゃあケイオス、あのね」

ルディアスが、猫を撫でる手を止めて顔を上げた。こぢらの様子を伺つかのように、顔を覗き込んで来て、そして。

父が人間に倒されたと知ったとき、何も感じなかつたわけでは無い。

面識が殆ど無いし、愛情なんて注いでもらつた記憶も無い。血の繫がりしかなかつたけれども、それでも彼は『偉大なる魔族の王』だつた。

自分たちを統べるもの・先導するものを失つた、その衝撃は最初こそ大きかつた。だがよくよく考えてみれば、666人も子供がいるのだから、すぐに誰か後を継ぐのだろう。

それが自分でないことだけは確かだ　と思つて、樂觀していたのだが。

父が死んで即座に、後継者争いは始まつた。血の気多き上の兄姉たちは、血で血を洗うすさまじいまでの戦いを繰り広げたと聞く。面倒なのと興味が無いのとで、全くいつもと変わらぬ生活を送つていた自分がその鬭争に巻き込まれたのは、ちょっととした偶然だつた。ただ飛んできた火の粉を振り払つたに過ぎなかつたのだが、その際に強大な魔力が兄姉やその他の父の側近だつたモノたちの目に留まつてしまつた。

そうして、ちょっとと息の長く苛烈な兄弟喧嘩の中で、気がつけば兄姉たちを圧倒的な力の差でねじ伏せ、やれ『次世代魔王』だ何だと担ぎ上げられてしまつていた。

……ケイオスにとつては、何とも傍迷惑な話である。

まあ、そういう意味では人間に全く恨みが無いではなかつた。それまでの平穏な生活が、面倒ごとと制約だらけの魔族の信仰対象者になつてしまつたのは、彼らのせいであると言えなくも無い。さりとて仇討ちをしたいかというと、それもひどくメンドクサカッ

タ。第一父の側近から事情を聞けば、悪いのは一方的に父なのだから。

「そんなこんなで、僕はルディに對して個人的な恨みがあるわけじゃないし。別に仇を取りたいとも思わないよ」

でもキミの『両親に対しては、僕の立場上、一度挨拶くらいはしておかないといけないかもね。

『魔王』ってのも色々大変なんだよ？

苦笑いしながら、かいづまんて説明する。

ルディはホッとした様子だつた。割と普通に見せてはいたようだが、やはり偶然とは言え『魔王』と対面するということに対して、相当

氣を張つていたらしい。

（あまだ9歳の子供だもんなあ。自分を殺しに来たかも知れない相手となんて、普通はこんなに冷静に会話できないよ）

内心感心してしまう。

「ケイオスつてちょっと変わった魔族なんだね。何か魔族っぽく無い感じ」

「あ～それ、口づるさい側近によく言われるよ」

肩をすくめて見せると、最初のときのようにルディアスはケラケラと笑つた。

ふと気がつけば、もう田が傾きつつある。そろそろ根城に戻らないと、口づるさい側近 フライスがまた癪癪を起こしかねない。

「さてと、それじゃ僕は帰るよ。魔族のための仕事もきちんとしないと、側近に雷落とされちゃうからね

「僕をさらわなくてもいいの？」

「うん、そんなことしても意味無いし」

急にルディアスが黙り込んだ。少しの間ためらつた後、こちらを上

目で見上げながら一言。

「ねえ、また来てくれる?」

「気が向いたらね」

といふか、キミの「両親への挨拶参りが済んでも僕が生きていられたらね。

何せ父を倒したこわ~い『勇者』様と『魔女』様なので、挨拶ひとつするのも命がけだよ。

……ところは心の中だけで答えておくことにする。

それにもしても、初めて接触した人間が「父の仇の息子」だったとは偶然とは恐ろしいものである。

このことがこの先どういう意味合いを持つてくるのかは分からぬ。だが、とりあえずその日の出来事が「人間という生き物は興味深く、それなりに愛らしい生き物である」という第一印象をケイオスに残したのは確かであった。

これが覆されてしまつのは、さう遠くは無い未来のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7331/>

販売員ではありません。

2010年10月11日04時52分発行